

# 石 桜 新 聞

発行所 盛岡市長田町7の60  
岩手高等学校  
岩手中学校  
出版委員会  
責任者 上野彰久  
印刷所 山口北州印刷

機関 フレック  
単行本 カタログ  
年史 トポスター  
新聞  
山口北州印刷  
盛岡市青山四丁目460585

## 昭和53年度 後期石桜会役員



田丸君



工藤君



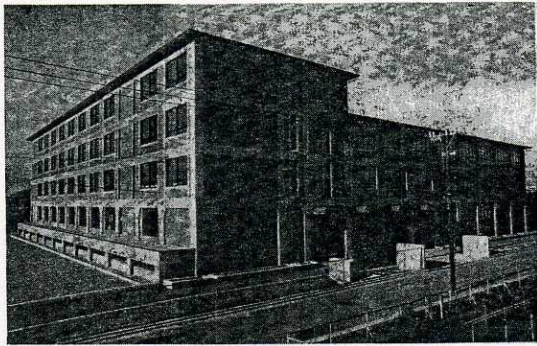
大釜君



中村君



鎌田君



### 新校舎落成

やっとなつた新校舎が完成した。昨年の九月一日に着工して、今年の八月二十日に引越したから約一年で出来上がったことになる。鉄筋コンクリート建てで、一階地上四階、外壁に茶色のタイルをはめこんだモダンな感じ。道行く人々の目を楽しませてくれる。内部は、本格的な洋風作りで、学校としては珍しいロビーまで作られている。広い窓に白壁の明るい教室は採光がよく、暖房も完備して、旧校舎とは比べものにならない。また、地下には、スプリンクラーとよばれる消火設備があり、一階以上は、連結消火栓が火災報知器と連結して、火災に対する備えは万全の上である。

他にも音楽室や理科実験室の充実ぶりはその学校では真似出来ないものであろう。これでやっとなつた新校舎は、高校らしい施設を得たことになる。ただ欲を言え



### 前期奨学金授与される

十一月六日、全校生徒の集まる朝礼で、前期優秀な成績を取った次の六名に奨学金が授与された。

- 一年E組 田村 望
- 二年E組 笠原 謙一
- 二年E組 小笠原和博
- 二年E組 大矢 裕之
- 三年D組 宇土 康
- 三年D組 杉江 信之

(奨学金は前期六カ月分の授業料に相当する額が授与される。)

### 新任紹介

顧問事項  
一、担当教科  
二、出身校  
三、趣味  
四、愛読書  
五、尊敬する人物  
六、本校生についての印象

工藤知法先生

### 進路状況

就職試験が十一月一日から解禁となり、翌二日からは国立大学の願書受付が開始された。今年も例年より早く三年生の進路志望状況がまとまった。これを就職就就に分けて前年度と比較すると大体的なことがいえる。

#### 進学

今年も全体的にみて本校の進路志望者(特に四年制大学)の増加が目につく。理由の一つは、前年度の実公立の共通一志願の実公立大学への進学を奨励していること、これまた専修学校や各種学校の志望者が増加しているのも今年の特徴である。

#### 就職

長びく不況で大学卒業業者の就職難が伝えられてきたのを反映してか、就職志望者が増加している。調査によっても、大学、短

### 新しい応援団幹部

十一月八日、我々の応援団幹部が次のように決まった。

- 団長 菅原裕司(二)
- 副団長 内田和彦(二)
- 書記 佐藤隆二(二)
- 会計 佐藤隆二(二)
- 庶務 佐藤隆二(二)
- 幹事 高橋美則(二)
- 副幹事 佐々木青(二)
- 副副幹事 菊地 徹(二)
- 副副幹事 宮沢俊幸(二)
- 副副幹事 三田村直樹(二)
- 副副幹事 吉田 誠(二)
- 副副幹事 新道 貢(二)
- 副副幹事 田中 淳(二)
- 副副幹事 田中 浩(二)
- 副副幹事 石川清朗(二)
- 副副幹事 木津川明(二)
- 副副幹事 照井和久(二)
- 副副幹事 千葉孝之(二)
- 副副幹事 高橋明広(二)
- 副副幹事 大矢裕之(二)
- 副副幹事 岡田 誠(二)

### 後期生徒会役員

去る十一月二十七日の役員改選の結果、後期石桜会役員が次のように決定し、すでに認証式を経て新しい体制でスタートした。新役員は次のとおりである。

- 会長 田丸正人
- 副会長 大釜洋一
- 書記 鎌田和彦
- 庶務 中村新司
- 会計 根元康行
- 執行委員 瀬川 敦
- 坂本守弘
- 佐藤雅宣
- 久保正敏
- 山岡一教
- 植村 集
- 後藤 博

### 中関博行

- 放送委員会 委員 山岡一教 委員 小原修 委員 鈴木和彦
- 文化委員会 委員 植村 集 委員 根元重通 委員 岩瀬秀喜
- 体育委員会 委員 後藤 博 委員 遠藤達也 委員 北田良宣

### 人生の中であって高校時代とはなにも変えがたい時期だと思ふ

この三年間は今後の人生において大きく影響して来ると思ふ。

現代はシラケ時代とも言われている。物事に對し、どうでもよいといった人が多いいことである。ある書物にこんなことが書いてあった。

「理想を持ち、夢を描く事は、青春として最も大切な事である。いわば、それは青年の特長である。だが、この夢を実現し、理想を達成するためには最も重要なことは、自己の厳しい対決に勝つて行く事である。つまり、自分が今や全能力、全情熱を傾けて行くことこそ、未来に生きる人の真実偉大な姿なのである。」

今、岩高の学校環境を考えると、決して新しいとはいえない。岩高の新しい分岐点にあって、生徒一人一人が一考する必要がある。

### 石割桜

恒例の後期生徒会役員選挙が行われ、石桜会の新しい体制が決まりました。役員となった人達には、半年間頑張ってもらいたいと思ふ。ただ考えなければいけないのは、役員選挙という重大な行事にもかかわらず、何かあまりにも「お粗末さ」が感じられる。候補者の立会い演説会もあまりに形式的だし、我々一般の生徒の無関心もひどいものであったように思ふ。これは対立候補のない信任選挙だからという事ばかりではないように思ふ。我々にとって生徒会とは何か、どうしてそれを改めて考えさせられます。

### 進路志望状況 (12月1日現在)

	3A(私文)	3B(私文)	3C(私文)	3D(私理)	3E(国立)	合計
大学	18	13	31	29	35	126
大短	1	0	0	0	2	3
各種	5	12	2	10	4	33
就職	13	12	6	7	5	43
合計	37	37	39	46	46	205

大への進学率は二二・三、年横ばいもしくは低下傾向にあり、逆に就職率は微増している。我々高校生は重要な転機にさしかかっていると言えよう。老朽化した旧校舎は見違えるほどの校舎設備、敷地の囲りに新しくサクははりめぐらされ、環境はすばらしく良くなりました。でも昨年よく言われた「新しい校舎に魂を入れるのは生徒自身だ」ということが、果たして実行されているのでしょうか。最近、おすががらもこの低迷した状態を改革していくという気運が応援団や二年生の間から起こってきておられておすががらを見ておられておすががらの芽がふさがることなく、大きく実を結ぶのを期待します。



山岳部

—インターハイ六年連続出場—

近年、本校山岳部の活躍、中、関東にアツトを張った。次期開催県の滋賀県の視察団が盛んに我部のアツトをターハイの出場権を得ておき、東北大会へも三年連続して出場しています。以下、その模様を山岳部に語ってもらいました。



東北大会三位入賞

我が山岳部は県大会で優秀メンバーに選ばれ、九月一日から三日間、山形県で開かれた東北大会に出場した。チームの柱である菊地選手が体調をくずし、二日目の朝、市内パレード開の大会参加であったが、見事三位入賞を果たした。

県下高校新人戦 各地で熱戦をくりひろげる

細川選手、個人戦優勝



細川選手

県新人戦が十月二十六、二十七日水沢で行なわれ、団体戦では惜しくも三回戦で敗退したが、個人戦では我部の細川選手がみごと優勝を飾った。

卓球

個人 一回戦 細川2-0廣沢 二回戦 細川2-0東和 三回戦 細川2-0一関 四回戦 2-0盛一 決勝 2-0東和 2-1東北

ハンドボール

ハンドボールは十一月十一日盛岡商業高校グラウンドで行われた。不戦勝 二回戦 岩手8-17盛三

水泳

県水泳新人大会は、九月十六、十七日の両日、花巻志戸平温泉プールで行われた。我が校は、部員八名といふ少人数ながら、よく健闘して総合六位という成績を収めた。

硬式野球

硬式野球は、九月十五日盛岡工業高校グラウンドで行われた。一回戦は不戦勝、二回戦は強豪の盛岡工業高校と対戦した。前半我部は善戦し強打を誇る盛工業打線を七回まで0点におさえ打線を八回にホームランを打たれ、その後九回に2点を追加され、結局3対0と惜敗した。

剣道

剣道は十月二十九日から宮古商業高校体育館で行われた。一回戦 不戦勝 二回戦 岩手1-4福岡

ラグビー

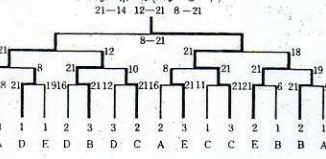
ラグビーは、十月八日宮古水産高校グラウンドで行われた。結果 一回戦 岩手6-0岩手 二回戦 岩手23-8盛岡農

庭球

私学の全国大会へ盛岡市内高等学校軟式テニス新人戦 十月二十八日 県営運動公園 テニスコート

校内体育大会

十月二十三日(月)、我高グラウンドで体育大会が行われた。十月は天候の変わりやすいためであるが、一日は晴天にめぐまれ、三日の全15組に教員組が参加して柔道、バスケットボール、ハンドボール、卓球の五種目に朝を競った。なお、中学生はソフトボールのリーグ戦を行った。結果は総合優勝3年D組21点、二位3年C組21点、三位3年B組15点であった。



随想

「科学の発達に思う」 三年C組 徹 「試験管ベビー誕生」 七月二十六日付新聞に記載されたこの衝撃的なニュースを、私は四月末から今でも、ハッキリと覚えていて、人工生殖によって人間が誕生し、科学が生命の創造にまで介入したことに人間のたじろぎがそこにあつたからである。これは医学界における歴史的偉業であると思う。しかし同時に、試験管ベビーの倫理、また道徳的規範などを求めるかという重大問題を社会に突きつけている。不妊症の治療とは、それほだまでして開発しなればならぬものなのだろうか。子供とは、かつては自然からの「授かりもの」であり、子宝として大切にされた。戦後、産院調剤が可能になり、子供は「作るもの」となった。今後は受精の段階で選択が可能になり、生命の私物化が実現してゆくであろう。

編集後記

石桜新聞第八十五号がやっと出来上がった。この新聞も実は四年もの間休刊してはいたが、内容としてはまだまだ満足な出来ばえではない。とくに私達の手に復刊にこぎつけたことを書きたい。休刊の間にも歴史は刻まされ、あの悪夢のような校舎火災から新校舎建設と大きな変遷を経た。校舎新築の記事を取材したが、ふと焼け残り校舎で授業が懐かし思い出された。それは、劣悪な環境の下でその中に住む人間の心も、無断外出、不足は日常茶飯事のことでした。真冬にしるしのない廊下を歩きながら、吹雪と戦ったものでした。今、この新校舎に入って、つくづくその有難さを感じることが出来ます。校内にも少しずつ活気が

そして、奇形児が生まれる危険があるにしても、事前に納得していればそれを負担するのは母親である、という意見があるが、私には腑外であるように思えてならない。実験の結果生まれてくるのは、人権を持つた一人の人間だからである。将来、障害があつたとか、母が認知症であつたとか、その重荷を一生背負うのはその子自身のことである。その子自身のことである、どうして見落されるのがある。母親のエイズがそこにははたらいているように思われてならない。私はまだ疑問に思うことがあつた。それは、世間はなぜ「血」にこだわるのだろうか。親になりたければ、育てるべき生命にめぐりあふ機会はいくらでもある。養子縁組、里親制度というのを社会では法的に認めているではないか。むしろ、そうした血統偏見がどんなに人間の心を狭くし、社会的差別を生みだしているかを考えるの方が、はるかに重要なことだと思つてゐる。